

身體も戻さぬ、じんみらいまで女
夫(晋庚申)

〔森羅萬象〕天にある總ての物を萬象といひ、
地にある總ての物を森羅と云ふ。法句經に、
〔森羅及萬象、一法之所印〕。

しんらはんさう 善惡邪正森羅萬
象、來れば映り去れば去り(大德冠)

〔森羅及萬象、一法之所印〕。

*じんりん 人倫絶えし深山の
奥(浦島)

しんら 人倫。倫は類の義。
〔人倫人類〕。倫は類の義。
〔しんら〕。しんどとも云ふ。しんらうを
見よ。越谷秀真編「物類稱呼」五に「クダビレ
といふことを繼内にてシンドと云。シンドの
轉語にや、シンドは辛勞なり」。

もくわな 抜かした(生玉)

すいせんしんによ
〔すみえんしんによを見よ。〕

すいけん 唐物町の唐犬扶持、傾城
町のすいけん扶持、色里の尨犬扶
持(千正犬)

すいこ 「すみこ」を見よ。

すうぜう 「すうげう」を見よ。

すうわり 手樽も足もいそいと、

〔多毛曰鹿と、是は
小野殿博撰「本草紀聞」に「多毛曰鹿と、是は
すいけんなり、毛長く獅子の如し、畿國の鹿
なり、狝の種類なり」。

〔「すみこ」を見よ。〕

〔「すうげう」を見よ。〕

草履も横にすうわりの、腰をよぢ
らし出でて行く(三國志)

〔「ぼつそりすうわり柳屋」云ふ言ふぢやあね
えか。美談詩論の松(寶永五年刊)巻五に、
「鳴はおつまを連れて出づれば、傍へはかま
が長つて、飛車角の並んだやうにおつまをか
こひ、押へには横へすうわりとした體女、酒
のしやく取る小美女まで居合腰に横へ」。

*すががく 二十五筋の琴の絲、結び
契りし年の數、いざすががきて箱
崎の、まつと聞かば我も松が
(國性) 風のすががき鹿踊(松風)

〔清酒〕歌なしに零或は三味線をかきまなす
と。狩谷雲之撰「毎條千金」に「スガは清字の心
なるべし、音のさやかなるを云ふなるべし」。

すかたん この軍介を東へ遣りほつ
かりすかたんさせんと、兎角汝
が詞とはも人ちに出る合點(備田川)

〔「すか」は透即ち空虛。「たん」は濫の意であら
う。愚をあげる。但言集覽に「すかたん
雜夷。(併諸新季寄)元日紫野大徳寺にて空瓶
にて雜夷にすわるとなり。「すかたん」は「
こたん」ともいふ。續遊笑覽卷九下、言語の
條に、すかたんとは愚かに濫されたるを云ふ
條に見えてゐる。〕

*すがり この吉岡がすがりの花な
ればこそ、ぬし達に身をふんまか
する(吉岡榮)

末枯の義、盛りの過ぎた終りなことをいふ。
和訓栞に「すがり。物の末になりて盡きふん
とすををすがるといふ。末枯の義なるべし」。

すがる 牡鹿の苑の法の導(これなれ
や、互にそれと道芝のすがるばか

〔「すがる」は「導」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

〔「すがる」は「導」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

〔「すがる」は「導」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

〔「すがる」は「導」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

〔「すがる」は「導」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

〔「すがる」は「導」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

りの懸草も、めば繁り添ふ母子草
千草八千草(用明天皇(二枚繪))

結合ふばかりの懸心といふに「すがり」を
かき合ふのである。鹿は殊に女夫睡じいもの
なればかく云うたのである。「すがり」は、古
今集、難別歌の中に、「すがり鳴く秋の萩原朝
たちて、旅行人をいつこ待たれ」とあり
て、似我蜂(土蜂)のことである。さるを古今
集の舊説や額注密勘などには、「すがり」を鹿
のこととしてある。粟林子が額注密勘に據つ
た例は他にもある。これも「すがり」を鹿
とする説によつたものである。(この文に
「牡鹿の苑の法の導」とあるは、その條を見
よ。)*書言字考用集氣形門に「鹿。鹿子」

*すぎやうゆり やりての杉重に樟の
名酒をもり口や(掬鹽)

〔「杉重」杉のへぎ板で造つた重箱、この文は
遺手の名の杉に杉重をいひかけたのである。

すぎなりさや 黒羅紗の杉形鞘に羽
織着て、お駕籠昇くのは(こればか

り(降摩歌)

〔「杉形鞘」(岩代國若松)會
津のこと。城主松平肥後守正信の鑑標。

杉形の中締 杉形の中締は豊前の小
倉(降摩歌)

〔「杉形の中締」
城標。小倉

すぎはひ 貧になる尾の裏借屋、は
やすきはひに唐人の行列賣と罷成

世を過ぐるなりはひの義。渡世に譬むわざ。
生業。「萬葉」上「鐘云云」を見よ。

すぎきはら 小指の血しは杉原に、お
して心をみかきもり(生世)

〔「杉原」は「小指の血」をいふ。生世
〔「杉原」は「小指の血」をいふ。生世

〔「杉原」は「小指の血」をいふ。生世

〔「杉原」は「小指の血」をいふ。生世

三年刊)土産門下服器部に「凡加奉書越前
鳥子、以是爲紙之最、杉原紙之所出也、始
謂之杉原紙、今省紙字、直稱杉原」。

*すぎや 裏のすぎやに寝てゐられ
ます(大經師)

〔「敷居屋」茶室の稱で、離座敷であつて四疊
半、四疊、三疊、二疊等の敷地である。歌書屋
の片隅に爐を切り、一隅には床があつて、掛
物或は花入を具し、また窓があつて明を取つ
てゐる。〕

杉山平八 杉山平八を四つ橋とはは
どうぢや、江戸からも京からも四
方へ引つり引張つた(今宮)

寶永宿の大阪の歌舞伎役者であつて、その藝
上手の方であつた。役者謀火燭(寶永七年刊
大阪の巻)に、藝評を「上止」としてある。こ
この文は、杉山平八は人氣がよかつたので、江
戸からも京都からも引張旗であつたの意。

すぎせり 花の時節は杉折の、雲
脚蝶形 洲崎形(酒呑童子) 持たせ
し遺手の杉折や、禿が袖の掬重
の(扇八景)

〔「杉折」杉材で造つた折で、菓子などを盛る
もの。〕

*すぎせ 此處にて逢ひ奉るも宿世
の御縁(堀山姥)

〔「しゆくせ」(宿世の約である。過去世。宿縁。
すぐち 呂太后から釣を取る女御の
身持、御親父の目にかからぬはす
ぐちが唇か(浦島)

いぐち。兎唇。但言集覽に「すぐち。俗御字
をすぐちと訓めり。(好色一代女人手代鉦た
たき箱足切)に限らず逢ふを適く思へば、
すぐち。萬九捕つて突退け、こり
やすくにふ。知れぬ間隠は隠すが祕

〔「すぐち」は「御縁」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

〔「すぐち」は「御縁」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

〔「すぐち」は「御縁」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

〔「すぐち」は「御縁」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

〔「すぐち」は「御縁」の義あり。むぎき
をよめる。此義あり。〕

す

密(待統天皇) やあずくにふめ、左様(待統天皇) ならは免状もお使も詮なし(女護鳥) 逆臣とはすくにふおのれが事、大海原が手にかけ朝敵坊主しめ殺らぬすくにふめとては丁ど打つ(女夫池)

「くく」に「くく」と書き、或は漢字を寫して「鼻入」木苑人など書いたのもあるとて「鼻入」の「ぞ」が「す」に轉じた語で、即ち「俗入」の義である。「俗入」は「俗入道」の略である。法體の著る書に云ふ語で、生奥坊主又は増補傳言集覽に云ふ。片山助聖編(京の水(元祿四年刊)に「今の花洛に腕よりする俳仙此俗入道に京の水龍神と誤りして」とありて、「俗入道」に「すく」に「く」と傍訓してある。増補傳言集覽に「すく」に「く」と傍訓してある。増補傳言集覽に「すく」に「く」と傍訓してある。増補傳言集覽に「すく」に「く」と傍訓してある。

すくばりかへる あ痛あ痛の聲高く、身内に動くは口ばかり、すくばりかへる すくばりかへる(日本武尊) 「すくばり」は「すくば」と同義である。「すくばり」は「すくば」と同義である。「すくばり」は「すくば」と同義である。「すくばり」は「すくば」と同義である。

すけとのたり 魚の中にも骨堅きすけとの鱗を、祐經と心に表して一の太刀(加賀會状) 「介黨鱗」一種である。本朝食鑑(八鱗の條に「鱗有俗稱介黨一者、色微黒帯白而形小、味亦不佳、最爲下品」。

すけべゑ それ誰のかがかりがすけべゑの、べゑの字形に見えすと(飛野) あそのの娘を寝言から附込んで、助兵衛の何の沙汰があるなら妾やいやちや(嵯峨天皇) 好(好色の意)をすけと轉じ、兵衛を添へて人名の如くひなした語であつて、好色者を云ふ。但言集覽に「助兵衛。婦人を云、移山按、往古のはやり言葉にて、好色をすけすけと云ふといふをすけべいと云ひしならん、人名の様に云ひなしたる流行詞多し、承知之助、淨介、筋右衛門など云ふ類なるべし」。

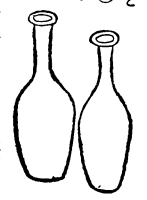
すこしくわん 「ちとくわん」を見よ。すこしくわん すこびた俄鬼め待つて居れ(大藏冠) 主ある女に抱付くはすこびたるいたづら者、生けては我道立たず(烏帽子折)

すさみ 繪に書く筆のすさみに、京や大阪の上臈も心で見れば今爰に、吉野初瀬の花も見る(籠襖三) 進む勢、思ふ、但言集覽すさみの條に、「口スサミ手スサミはなまきむ心也」。

すずし 露にやつる夏の蟲、己が妻戀やさしやすしや(曾根崎) 名さへお梅は聲もすしや(萬年草) 八重姫腹立つ聲音にて、ええすしないなしやんせ、おのし様には言はぬぞや(伊豆日記) 揚屋の二階をふみも習はぬ此道を、ちつとすしなぞ推

参(加増會状) 釋詞「すし」を見よとの義であらう。意氣なるをいひ、また轉じて、出過ぎのころに返きをいふ。生意氣。老子語録追加に「今以て世上にて、指出者のころの返きものをすしな奴なりといへり」色道大鑑(延寶年中成)に、「すし」を解釋して、「こなたにてはきまで思はぬに、先方より馴れ馴れして言ひ寄るを疑みていふ詞」と見えてゐる。好色一代男(天和二年刊)巻之六、食まして袖の裾の條に、「風俗大夫職にそなはつて、衣裳よく着こなし道中たいていに變り、少しすしに見えて幅のなき男は、おそれて逢ふこと希なり」。心中萬年草の「ここの文は、梅の縁で「すし」に「すし」(秘師)をひかけたのである。

すず 文藏幸と三方を被りながら、すずを口(飲)女用訓蒙獨逸所載)へ寄せつと(鶴城佛原) 飲み(鶴城佛原) 「鶴城佛原」の徳利。



すずし 風もすずしの絹 袴(堀川波鼓) 萌黄のすずし(歌念佛) 生帯(練らぬ生絲織物) すずし 恐らくすずしいこの新七に無い難つけて吸出させ(淀鱈) (清原白南)

すずだけ 「やなぎすずだけ」を見よ。すずすずし 武士の仕方のすずすず(堀川波鼓) 夕發暗き黒革絨、すすだげに出立ちて(國性爺) 暖簾一重彼方にはすすとき母の鐘の聲(香庚申)

すずのさざらつと 乗り飛び(籠襖三) 「籠襖原」籠襖の生淺してゐる原。「すず」は篠である。

すずめずし 櫻山庄左衛門・福鳥ちやとおしやる、心ばの・小體なれども服詰めて舞臺一ばい、かさもあり藝に質もある、口中のしよりしよりしたる雀籠(官宮) 「雀籠」曾根崎の西原なる福鳥村の名物である。改正増補日本庶子元祿十一年刊(卷三)攝津國中より出る名物の類の條に、「雀籠」江ふた也、腹に飯を多く入たるが雀籠ごとくふるればかく云也。攝津群談(元祿十四年刊)卷十六、名物土産部に、「福鳥雀籠。西成郡福鳥村にあり、鮮魚の小を青割にして潮に浸し令乾之、飯を入れて作之、魚の腹脹て形雀に似たるを以つて號之。鮮魚とは洲走をいひ、魚の小さきもの」。

裾版の對の御道具 裾ぶくらの對の御道具、出雲の松江(籠襖歌) 槍袴(松江) (籠襖の對の御道具) 出守松平 近の槍 標。

すだく 聲いきどしくすだきなが息あへぐをいふ。和訓栞に「すだく」萬葉集に多集せり、蟲のよりあつたりて取



すくばりかへる——すだく

しき意にのへり、果袍の義にや、伊勢物語に鬼のすたくとも、眞衣本に出入と書るは義をもて書り、兼盛集には人のすたくともとあり。俗に息のあへくおすたくといふも同じ、玉葉集に野もせにすたく白露とも見えたり。

すたすた坊主

難行苦行のすたすた坊主、すたすた言うてぞ加持しける(隅田川)

昔醫文佛の時商人に代つて、平素偽を言うて物を賣る罪過しに、禪に詣でて垢離をとつた乞食坊主であつたが、後には歳末頃裸で鉢巻を締め、注連繩を腰に纏ひ、手に扇と錫杖を持ち、すたすたすた坊主の来る時は腰には七九の注連を張り、頭にしつかりわをはめて、など走へながら踊つて施物を乞うたため、京阪では天保頃までもこんな乞食坊主がゐると云ふ。

すためん

和蘭語(Stamene)である。和蘭から舶來した毛織物の名。萬金蓮葉袋・四に「唐人雜紗、これ雜紗の中品なり、地はばかねさし四尺一寸位より三四寸まで、但織耳なし、赤きを次多綿といふなり。」

すぢきりふ

筋きりふに塗篋の矢(最明寺殿)

筋切文(鷲の羽の黑白の文切れ分れ、筋あつてあきやかなのを云ひ、この羽で短いだ矢を筋切文の矢と云ふ。

すつてうづきん

「しゅちやうづきんを見よ。」

すつのかは

その歌は龍田の川、おのればすつづのかはなりと、御戯に伺候の武士ざざめき笑ひ賑ひけり(國志) 前司が死骸をどつと蹴飛ばし、ヤイすつづのかはめ談合

「すつづは素早の義であらう。敵地に入る忍者の稱であつたのが轉じて、騙者、盜賊、盜賊根性などの意にいか。「すつづのかは」「かは」「てんぼのかは」「つづのかは」など云ふ「かは」がこんな語にも解したる、意義のないものである。安原貞宗撰かた言(歴安三年刊)に「盗人をすつづばすつづのかはなどといふは如何。又すつづといふことは、人の手にもたれる物をもすり運びまじにとつといふやうの事より物そめたる名なりか。本朝二十木孝(貞享三年刊)卷之三、心を吞まる蛇の形の條に「人の物を取る事面白く、此道のすつづは、かへに合ひ餘餘取上げられ、つとなく内藏空大者と言立てられ。狂言、あやひに「すつづばなら種かかましよう。」「すつづのかは」を水波の皮または透波の皮などと評してあるのは當字である。」

「すつづは素早の義であらう。敵地に入る忍者の稱であつたのが轉じて、騙者、盜賊、盜賊根性などの意にいか。「すつづのかは」「かは」「てんぼのかは」「つづのかは」など云ふ「かは」がこんな語にも解したる、意義のないものである。安原貞宗撰かた言(歴安三年刊)に「盗人をすつづばすつづのかはなどといふは如何。又すつづといふことは、人の手にもたれる物をもすり運びまじにとつといふやうの事より物そめたる名なりか。本朝二十木孝(貞享三年刊)卷之三、心を吞まる蛇の形の條に「人の物を取る事面白く、此道のすつづは、かへに合ひ餘餘取上げられ、つとなく内藏空大者と言立てられ。狂言、あやひに「すつづばなら種かかましよう。」「すつづのかは」を水波の皮または透波の皮などと評してあるのは當字である。」

「すつづは素早の義であらう。敵地に入る忍者の稱であつたのが轉じて、騙者、盜賊、盜賊根性などの意にいか。「すつづのかは」「かは」「てんぼのかは」「つづのかは」など云ふ「かは」がこんな語にも解したる、意義のないものである。安原貞宗撰かた言(歴安三年刊)に「盗人をすつづばすつづのかはなどといふは如何。又すつづといふことは、人の手にもたれる物をもすり運びまじにとつといふやうの事より物そめたる名なりか。本朝二十木孝(貞享三年刊)卷之三、心を吞まる蛇の形の條に「人の物を取る事面白く、此道のすつづは、かへに合ひ餘餘取上げられ、つとなく内藏空大者と言立てられ。狂言、あやひに「すつづばなら種かかましよう。」「すつづのかは」を水波の皮または透波の皮などと評してあるのは當字である。」

「すつづは素早の義であらう。敵地に入る忍者の稱であつたのが轉じて、騙者、盜賊、盜賊根性などの意にいか。「すつづのかは」「かは」「てんぼのかは」「つづのかは」など云ふ「かは」がこんな語にも解したる、意義のないものである。安原貞宗撰かた言(歴安三年刊)に「盗人をすつづばすつづのかはなどといふは如何。又すつづといふことは、人の手にもたれる物をもすり運びまじにとつといふやうの事より物そめたる名なりか。本朝二十木孝(貞享三年刊)卷之三、心を吞まる蛇の形の條に「人の物を取る事面白く、此道のすつづは、かへに合ひ餘餘取上げられ、つとなく内藏空大者と言立てられ。狂言、あやひに「すつづばなら種かかましよう。」「すつづのかは」を水波の皮または透波の皮などと評してあるのは當字である。」



「すつづは素早の義であらう。敵地に入る忍者の稱であつたのが轉じて、騙者、盜賊、盜賊根性などの意にいか。「すつづのかは」「かは」「てんぼのかは」「つづのかは」など云ふ「かは」がこんな語にも解したる、意義のないものである。安原貞宗撰かた言(歴安三年刊)に「盗人をすつづばすつづのかはなどといふは如何。又すつづといふことは、人の手にもたれる物をもすり運びまじにとつといふやうの事より物そめたる名なりか。本朝二十木孝(貞享三年刊)卷之三、心を吞まる蛇の形の條に「人の物を取る事面白く、此道のすつづは、かへに合ひ餘餘取上げられ、つとなく内藏空大者と言立てられ。狂言、あやひに「すつづばなら種かかましよう。」「すつづのかは」を水波の皮または透波の皮などと評してあるのは當字である。」

い(夕霧)

(女用訓蒙園叢所載)

「角前髪」在時少年の者の
とつた前髪であつて、頭
の頂を剃り、額髪の生際
を角ばりて剃込んで髪を
結うたもの。



〔髮前角〕

すむる ばまさん・きう・こう・りう・

すむゐ(冥途飛脚)

本學の呼び聲であつて、四を云ふ。拳會角力
闘會に「四をスムキといふは四英といふこと
なり。」「けん(拳)をも見よ。

*すむじ 待つ身より待たるゝ身の
千々の思を御すもじ(孕常盤) 其日
は何れも御苦勞すもじ致せしと
(態) 弟御義助様のお心をつくつ
くとすもじ致すに(千正犬)

推量(の)文字詞である。文字詞は、足利時代の
末御廷式微にして供御の備はらない爲
に、女官等がその物の名をいふを忌んで何も
じというた譯語から起つたものである。御前
義經記(正徳二年刊)七之卷、別路の文の條に
「まことに過ぎつる頃は恥かしき身の内證を
聞かせませらせ、其折からのせつなき甲さぬと
ても御すもじあれかしに候。髣髴無僧元祿
九年刊巻之一にも、「神慮もすもじされて面
白く。

すもぞいの こな様それでもすもぞ
いの、私ば病になるわいの(會根樽)

すゐ(おのゝ)の轉訛。

すものぐさ ありしその夜の移り香
を、洗ひ落すなすもの草、連立つ
道の遅かれと(用明天皇)

「すゐものぐさ」とも云ひ、酢漿草(かたば草)の異名で
ある。

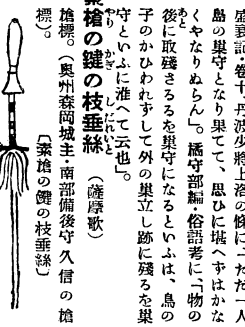
すもり 女房の懐には鬼が住むか蛇

が住むか、二年といふもの巢守に
して、やうやう母様伯父様のお蔭
で陸じい女夫らうの寝物語もせう
ものど、樂しむ間もなくほんに酷
いつれない(天網鳥)

「巢守」物の後に取壊されることを云ふ。源平
盛衰記巻十丹波少將上洛の條に「ただ一人
鳥の巢守となり果てて、思ひに堪へずはかな
くやなりぬらん。」「巢守部編(俗語考)に「物の
後に取壊されるを巢守になるといふは、鳥の
子のかひわれずして外の巢立し跡に残るを巢
守といふに准へて云也。」

*素槍の鍵の枝垂(薩摩歌)

素槍(すそやり) (奥州森岡城主南部備後守久信の槍
標。)



*すりこぎ 右の腕があたまがち
なば若し播粉木などは参らぬ
か(今宮)

「播粉木」味噌汁。味噌汁は味噌を播粉木で磨
潰して作るよりいふ。謠に「播粉木を食はぬ
者はなし」といふ。播粉木も味噌汁をいうた
ものである。

すりばちびん 「はちびん」を見よ。

するがづつみ 紙おしひろげくるく
ると、駿河づつみに手ばしこ
く(冥途飛脚)

「駿河包」元祿金銀吹替前は江戸、京、駿河、佐
渡で小判を造つた。これ等の座で小判を包む
に一定の方式があつた。駿河包は駿河小判の
包方であつて、即ち紙で小判を巻いて其端を
紐で括つたものである。序に云、駿河小判の
ことは、大日本貨幣史巻四に「駿河銀判小判
金」とありて、徳川家康が駿府で鑄造した小
判金で、縦二分五分、横一寸六分五厘、重量

四毫二分五厘あつて、後藤・花押等が墨で書
いてある。

*するすみ 池月・磨墨・大黒・小黒・
うせしのかた(大蔵虎)

「磨墨」長門平本家物語、摺墨池月の條に、
「する墨はくろき馬のふくと遣しきにてぞあ
りける。」

*する 所の衆ならするである
(二枚槍) これ半七、伯母は粹ぢや
(女腹切) 道頓堀でござんしよの、
よいす(次期日)

「推量」または推察の義、轉じて、世間で探
まれて人情に通達し事物に巧者なるをいふ。
世間人情を察知通達すること。花柳社會や藝
人間の事情に通じて意氣なこと。この語、大
藏流狂言などにちも見えてある。粹、粋、水など
と掛くは體で當字である。皇都午睡初編中の
巻に「遊里にするといふは推量する心にて粹
と掛き、萬事に姿敷人と云ふ義なり、東都に
て通といふも、萬事に通達する義なり」と見
え、無物庵別世界撰(當世左様侯の中に、「通
者」と書いて「する」と傍訓してある。

*馳 矢よりも早し千里の馳(三國志)
鞭をくんでも馳逝かず馳逝かずし
て(待統天皇)

「馳」蒼白雜毛の馬。史記項羽本紀に、「項王
乃悲歌抗戰、自稱詩曰、力拔山兮氣蓋世、
時不利兮離不逝、離不逝兮可奈何云云。」

*するあて さあすあてに言うて
見よ(麿丸)

「推當」推量して言ひ當てること。當て推量。
見よ(麿丸)

*するかん 長は風折水干、後見お出
入どやどやと(酒呑童子)

「水干」褌を用いないで水張にして干した編の

義であつて、これを以て仕立てた狩衣を水干
の狩衣と云ひ、略して水干と云ふ。其製狩衣
と同略しく、菊繻は總をさしひらめて前に二
つ後に八つ附け、紐は九組の緒で、前の領の
上かどに短けて長く、後の紐は領の後の中央
に附けて附けて。水干の袴は直垂の袴のやう
で、地も色も上と同じ。水干は上下一般に用
み、童子も着用した。

*するま 世の人のわらびませうが
お笑止と、悔めば夫はすぬきの
涙(宵庚申)

「隨喜」他人のなす功德善根を見て、これに隨
同して喜ぶこと。心から有難いと思ふこと。
修儀要旨に、「隨喜他修善善徳得成。巢林
子。このこと文は隨喜に芋選をひかけたので
ある。」

ずぬぐだらに 三年この方隨求陀羅
尼百萬遍、この度小松様の御願の
爲(孕常盤) なう少將様、何時も此
方の里で餌刺が鳥をさす時、隨求
陀羅尼を唱へ念佛申せば一つも得
ささぬ(虎が隠)

「隨求陀羅尼」佛説隨求自在陀羅尼神咒經の
中に説ける陀羅尼である。これ佛菩薩の説か
れた詞で、萬徳を包摂する咒語である。曾我
虎が磨にいへる隨求陀羅尼は、白傘蓋神咒を
いうたのである。「だらに」おんをのり云云」
を見よ。

するこ 大事の大事の太夫様に、鹽
の辛い梅干婆がするこな奴と思召
そ、お恥かしゃといひけれ
ば(齋門松)

「するこ」(齋狂)を詠つて「するこ」とも云
ひ、酒に酔うて氣の狂ふこと。轉じて常人と
變つた氣狂ひのやうな言動をなすことを云

ふ。醉狂奇態なども見えてゐる。石曼卿の詩句に「醉狂勁鶴舞。寃獨平家物語寶永七年刊(卷之四)空鶴は比叡の雲鶴の條に「酒に醉ものはあれども、菓子に醉狂する例なし。」

ずみさう 色よき娘を人身御供に取らざれば一在所崇をなす、其臉には山うつぎの折枝が鳴渡つて棟木に立ち、家の柱より血しほ流れ出づ、其瑞相には前方に必ず取らるべき娘が熱病を病む別知らせあり(振袖也) 道に背く無分別、追付獄門の相伴せんずる瑞相、ええ笑止な(聖女)

ずみさう 瑞相吉兆を云ひ、轉じて前兆の意に云ふ。平安城(古淨瑠璃)第一に「三人の逆臣撥ひ起り、我君を犯すべき瑞相、アア恐るべし。」

ずみさう 小倉彦九郎が女房なるぞ、推參な事をして必ず我を恨みやるな(堀川波敷) これ從次郎殿、理非はともあれ、兄御に向つてげか(げ統天皇)

ずみさう 推參してまゐる義。轉じて無禮の意に云ふ。

ずみさう 水精輪の地をならし(松風)

ずみさう 水精輪水晶で成れる輪寶。

ずみさう (隨身) 太上天皇攝政明白大臣大中少將等に從ひ隨護する者で、これを兵仗とも云ふ。左右近衛府の舍人即ち將曹生番長近衛等の者これ勤めた。太上天皇の隨身を側隨身と云ふ。攝政明白の隨身は凡十人にして、左右近衛府生各一人近衛各四人を隨身となすが例である。大臣大將は隨身八人で、即ち府生一人

番長一人近衛六人である。大納言大將は隨身六人で、即ち番長一人近衛五人である。中納言大將より少將は隨身長一人隨身四人或は二人である。隨身の裝束は概して冠・襦袢・袴を着け、弓筋を帶し太刀を佩いた。

ずみさう 不思議の瑞夢を感じて「用明天皇」この邪法國に起り日月の翼を踏折れば、王法忽ち覆り地に墮つる瑞夢ならすや(徒合歌)

ずみさう 瑞夢瑞相その條を見よ前兆の意にいふやうに、瑞夢を前兆の夢の意に云ふ。

ずみさう 北方一徳の水あり(嵯峨天皇)

ずみさう 水輪世界地醫の下底をなすもので、風輪上に水輪があり、水輪の上に金輪際がある。俱全画頭に「安立器世間、風輪最居下、其量廣無數、厚十六落文、次上水輪、深十一億二萬、下八落文、水輪凝結成金。」

ずみさう 末摘花の間の雪(冷泉節)

ずみさう 末摘花源氏物語中の人物で、常陸君の女であつて、光源氏と契を結んだ。名に立つ末のと言置きし云云(見よ)。

すみさう 末摘花は紅の花(用明天皇) 末つ小葉の染衣も、心うつらす照手の姫(小栗判官)

すみさう 末摘花の花云ふ。裏の上に房があつて、その房を摘取る故にこの名がある。「末摘花の染衣は紅色の染衣である。當流小栗判官この文に「すみさうは」とあるは誤り)

すみさう そばから喧嘩のすをかふも、これ堪忍のせ(こしなる(感))



すん 二寸より上目なく女稱

すん 「寸」三枚骨牌にて數を寸といふ。蓋し又「きな」の條を見よ寸と書いてすんといふ。

すん あのお男のおなかの臍のすんに印判捺ふたがよいわいの(持統天皇)

すん 墨を染め、虎の順にさし當て、四五間間をおきながら、筆引く方に從つて「反魂香」大袋は同國唐津すん切鞘に銀の笠(藤原歌)

すん (體)を配つて「すん」とも「す」ともいふ。體とは年齢などの中心なる柔軟な部分をいひ、轉じて物の箇中、胸中をいふ。「瓜のすん」「すん」と、頭のすんきりが痛む(中國地方語)などいふ「すん」も、體の配つた語である。この「すん」を「腹」「寸」などと書くは當字である。「臍のすん」とは、臍の中心のこと。「虎の順」とは、虎の胸中のこと。「すん切鞘」とは、簾鞘を胸中から切つた形、即ち先を輪切にした形の體鞘をいふ。

すんばく 此寒氣で寸白でも起つたか、どれ其寸白の蟲捻殺して本復させんと(川中島)

すんばくちや菅の笠 (三國志) 濡れてすぶくちやの菅笠といふを、朝鮮語めがした語譯であらう。

すんばろぼう 腕も脚も打落し、すんばろぼうにしてくれん(三國志)

すんばらばら 其の條を見よとも云ふ。蓋し「すべりばらばら」滑倒の「す」を略して轉訛した語であらう。つるつる坊主。すつべら坊主。蘆屋道滿大内鑑第四に、「耳漏かけてこそごぞすんばら坊主すりこぼす」。花山院都興紀海誓願に「雀すりの襟にこれんな腹になつた時、よい取合せですんばらばら、尼御所への流者。」

せ

せ 戀情け、爰をせにせん蜷川、流るる水も行き通ふ(天網島)